

おいも探訪 32

その2

さつまいもアナウンサーとして、魅力・価値・文化を伝えたい！

～“伝える力”を軸に、企画やプロデュースへと広がる挑戦～

川越おいも友の会 事務局長

やまだ えいじ
山田 英次

1：はじめに～女性によるオイモ起業～

サツマイモ業界にとって、女性の存在は昔から消費者として重要であるが、特に21世紀に入ってから、焼き芋ブームと共に、自らサツマイモを生業とする女性が増えてきた。おいも好きが高じて、焼き芋屋になったり、小さいながら大学芋屋を開いたりしている。畑があれば、サツマイモを自身の畑で生産して焼き芋を販売したり、加工品を作ったり、さらにカフェを経営したりする方もいる。おいものお菓子を手作りして、小さなお店を開いたりする方もいる。おいも美容家の方もいるし、おいも料理家もいる。また、さつまいもグッズを手作りして販売し、静かな人気を博している女性の方もいる。



【鳥越佳那さん】

川越のサツマイモまんが資料館で、川越市のマスコットときもを持って。

そのような多様なサツマイモ女性起業家の動きのなか、新たに登場したのが、「さつまいもアナウンサー」と自ら名乗る鳥越佳那（とりごえかな）さんだ。ボランティアではなく、ビジネスとしてころざしを持って社会に貢献しようとしている。将来に向かって、どのような夢をもって活動していくのか、川越のサツマイモまんが資料館で詳しくお話を伺った。

2：《ステップ1》・・・アナウンサーになるのが夢！

鳥越佳那さんは、鹿児島県生れで鹿児島県育ちである。小さい頃から身近にサツマイモがあり、おいも好きであったという。蒸かし芋が自然と日常の食卓にのぼる家庭で育ち、家族がそろってサツマイモ好きだった。また母方の曾祖父がサツマイモ農家だったこともあり、今ではサツマイモ好きの血が流れていると自覚している。

鹿児島の風土のなかでのびのび成長していったが、転機となったのは小学生5年生のときだった。地元のコミュニティFMラジオに出演してアナウンサーの魅力を実感し、その職業に憧れを持つとともに将来はアナウンサーになるという夢を抱いた。その気持ちは強く、鹿児島の高校を卒業後、東京都杉並区にある東京女子大学現代教養

学部人間科学科コミュニケーション専攻に入学した。アナウンサーに必要な基礎的な知識を学ぶと共に、学生時代は、某有名テレビ局のアルバイトとして有名番組のキャンペーン出しなども行った。そして、2017年に静岡第一テレビに入社して、アナウンサーになるという夢をかなえた。

静岡でのアナウンサー時代は、主に情報バラエティ番組や農協番組のリポーター、朝の情報番組のメインMCなどを担当して活躍し、退職するまでの5年間で、150軒以上の農業生産者へのインタビューを行い、600食以上の食リポをこなした。農業番組に携わる中で野菜や産地に興味を持ち始め、基礎知識を身につけるため「野菜ソムリエ」の資格も取得した。

生産者への取材では、同じ農作物でも作る人や場所によって味が変わることを実感したという。

3：《ステップ2》・・・サツマイモの癒しパワーに目覚める！

多忙なアナウンサー時代、3年目の頃、



【地域おこし協力隊活動】

鹿屋市の地域おこし協力隊として、地元のさつまいもを使った新商品のお披露目をInstagramでライブ配信。生産者と消費者をつなぐ発信に取り組んだ。

不規則な生活の中で体調を崩し、何を食べても美味しいとは感じなくなってしまった。そんなとき、体調を心配して鹿児島から静岡に来てくれた母が、近所のスーパーで、たまたま焼き芋を買ってきてくれた。それはべにはるか焼きたての焼き芋だったが、(普段から焼き芋好きであったが) それを食べたとき、とりわけ美味しく感じて涙があふれそうになった。サツマイモの癒しパワーを心身共に実感して感動した。自分の身に寄り添って救ってくれた、その魅力に改めて気づかされたという。

4：《ステップ3》・・・サツマイモの魅力伝える「さつまいもアナウンサー」へ！

2022年に5年間勤めたテレビ局を退職すると、サツマイモの魅力を良く知り活躍する新潟県小千谷市のサツマイモ女性起業家の新谷梨恵子さん(株式会社 農プロデュース リッツ代表及びさつまいも農カフェきらら経営) のところで、一週間ほどサツマイモの業務を農業インターンとして経験した。その時、新谷さんから、「あなたは生産者より、おいもの魅力を伝える人の方が向いている」と言われた。

その言葉におされ、「伝える」ことでサツマイモの産地に貢献できないかと考え、サツマイモ大産地の鹿児島県鹿屋市の「地域おこし協力隊」に応募した。運よく「かのやPRレポーター」を募集していたために採用されて、2022年12月に鹿屋市に移住し、PRレポーターの協力隊員へと転身した。

鹿屋での地域おこし協力隊の任期中、鹿屋市内を廻り、かのやPRリポーターとし

てYouTubeなどのSNSを活用し、他のメディアでも「市の特産品やイベントなどについて」200件以上も精力的にPR活動を行った。もちろん、特産品としてのサツマイモの情報発信にも力を入れた。

印象に残る出来事の一つが、鹿屋農業高校の生徒の皆さんが育てた「かのや紅はるか」を活用した商品開発企画。販路に悩んでいるという相談を受け、地元の芋スイーツ専門店のパティシエを紹介したことをきっかけに、新たなスイーツが誕生した。

そして、Instagramの生配信でお披露目会を行うと、「食べてみたい」「鹿屋に行ってみてみたい」といった声が全国から寄せられ、生産者と消費者がつながる瞬間を実感した。

さらに、高校生からも「自分たちの農業がすごい取り組みだと気づけた」という声があり、発信することが地域の誇りにもつながるのだと確信した。また、市民農園を借りていろいろな品種の栽培にも挑戦し、とても面白かったという。鹿屋での、地元の人々と、さらにおイモ関係者との良い縁

を結べたことが、なにより大きな財産になったと実感している。

5：《ステップ4》・・・独立して正式に「さつまいもアナウンサー」として活動！

鹿屋市より東京へ移り、2024年に正式に「さつまいもアナウンサー」という肩書で独立した。目標にかかげたのは、サツマイモで人々と地域（産地など）を繋ぎたいという思いから、「つくる」「伝える」「つなぐ」の3つを軸に“お芋の仲人”になることを、まず目指しているという。

◆一番目の「つくる」とは、サツマイモの関連商品に関係者とタイアップして作り出すことで、サツマイモの可能性を探りながら、地域密着型のオイモ製品などをカタチにしたいという。

◆二番目の「伝える」とは、テレビ局のアナウンサーとしての経験のなかで、伝えるべき、わかり易い言葉と向き合ってきたことを活かし、地域の方々（産地の農家や業者、住民など）に寄り添って発信すること。具体的には、フリーアナウンサーとして、メディア出演やイベントMC、ナレーションなどいろいろと担って



【さつまいも栽培①】

鹿屋市で畑を借り、さつまいも栽培に取り組んでいた際の一枚。現在も知人の畑で栽培を手伝いながら、その魅力を発信している。



【さつまいも栽培②】

プランターでのさつまいも栽培に取り組み、日常の中で楽しむ“さつまいもライフ”の様子を発信。収穫時の一枚。

いきたいという。

◆三番目の「つなぐ」とは、鹿屋市での地域おこし協力隊の体験で、サツマイモを通して人々との輪が広がっていったことから、サツマイモ生産者及び加工販売業者などと消費者をつなぎ、地元の誇りになるようにすること。具体的には、イベント出店やワークショップなどにかかわってきたいという。

フリーになって、ここ2年ほどの実績で、サツマイモ関係の大きなイベント「さつまいも博」『全国焼き芋サミット』『おいもフェスカのや』などで、ステージ司会を務めた。また、今までのご縁で静岡や鹿児島関連の行事では、司会を任された。そのほか、イオンモール鹿児島では「さつまいもマルシェ」のコーディネーターで協力したり、東京三越デパートでの「さつまいも催事」にも参加し、鹿児島の商品販売を通して産地のPRを行った。鹿屋市とのご縁で「かのやばら大使」にも任命されたほか、スペシャリストとして活動の幅を広めるため、野菜の知識を一段と深めて「野菜ソムリエプロ」というひとランク上の資格も取得した。

“伝える力”を基軸にさつまいもアナウンサーとして挑戦・成長し、今後の目標は企画やプロデュースもこなして活躍の場を広げていくことだという。

6：「おいもライフ」を楽しむ・・・好きこそ成長の糧

生まれ育った地元の鹿児島には、サツマイモ関連の郷土料理がいろいろあって、とても楽しい気持ちになるという。代表的なものとして「からいもねったほ」（サツマイモ餅）や「ガネ」（サツマイモの千切りのかき揚げ）、「芋でんぷん汁」（具をいれたお吸い物に、熱湯で溶いた甘藷でんぷんをいれた汁物）、「落花生豆腐」（落花生をミキサーにかけ、甘藷澱粉で固めたもの）などがあり、心から親しみのある味だと感じている。

東京での生活では、そんなおイモの郷土料理を日常的には食べられないが、好物の焼き芋は、冷蔵庫にたくさんストックしている。好きな品種は、20代の頃はネットリ系が好みだったが、最近はしっとり系になってきているという。



【さつまいもアナウンサー】

全国焼き芋サミットで司会を担当。生産者の想いや地域の魅力を言葉でつなぐ役割を担っている。



【スムージー】

焼き芋を使った「おいもスムージー」は毎朝の楽しみ。旬の食材と組み合わせた一杯で1日をスタート。

その焼き芋をそのまま食するばかりでなく、マイブームとして「おいもスムージー」を毎朝楽しんでいる。季節によって他の食材を加えて組み合わせ、ミキサーにかけて実験し、いろいろな味を楽しんでいるとのこと。朝、おいものスムージーを作るときが、ひとつの癒しになっているともいう。最近では、春キャベツ、いちごなどのほか、ヨーグルト、はちみつ、黒酢、きな粉を入れてバランスを整え、美味しく仕上げています。その日や体調に合わせてアレンジすればサツマイモはあらゆる食材と馴染むことに気づかされたようだ。また、おいもスムージーを毎朝摂ることにより、腹持ちもよく、1日を元気に始めるスイッチがはいるらしい。

そのほか、さつまいもアンバサダー協会の行事にも参加し、栽培体験や、さつまいも品種食べ比べ会などを楽しんでいる。

7：新しい風として～伝えヒトから織るヒトへの変貌を期待～

鳥越さんは、座右の銘として母親からの

言葉、「起きること全てに意味がある」をモットーとしている。いろいろなヒトとの出会いや出来事に縁を感じ、明るく元気に楽しく進んでいる。サツマイモ業界も、おいもビックイベントの流行や各種の華やかなスイーツの登場で盛り上がっている状況にみえるが、業界全体としてはいろいろな課題を抱えている。将来も明確でない。

タテ糸は男性目線だとすれば、ヨコ糸は女性目線である。タテ糸ばかり集まって活動しても布は織れない。ヨコ糸ばかりの活動でも駄目である。鳥越さんには、「伝える力」「つなぐ力」を基軸に、タテ糸とヨコ糸を織り、同じ心を持つ人たちと良い縁をもちつつ、一緒になって、将来は新しい布（サツマイモ業界の飛躍）を織り出すヒトになっていただければと、筆者はその活動の兆候をみて望んでいる。

新しい風として、運が味方し、「伝えヒト」と共に「織りヒト」へと変貌し、今後活躍していただくことを何より期待したい。